

Title	ニーチェ『ツアラトウストラ』における「力となる意志」
Sub Title	Der Wille zur Macht bei
Author	岩下, 真好(Iwashita, Masayoshi)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	2016
Jtitle	教養論叢 (Kyoyo-ronso). No.137 (2016. 2) ,p.27- 53
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論説 『ツアラトウストラはこう言った』を精読する③
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00062752-00000137-0027

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

『ツァラトウストラはこう言った』を精読する③

ニーチェ 『ツァラトウストラ』における 「力となる意志」

岩 下 眞 好

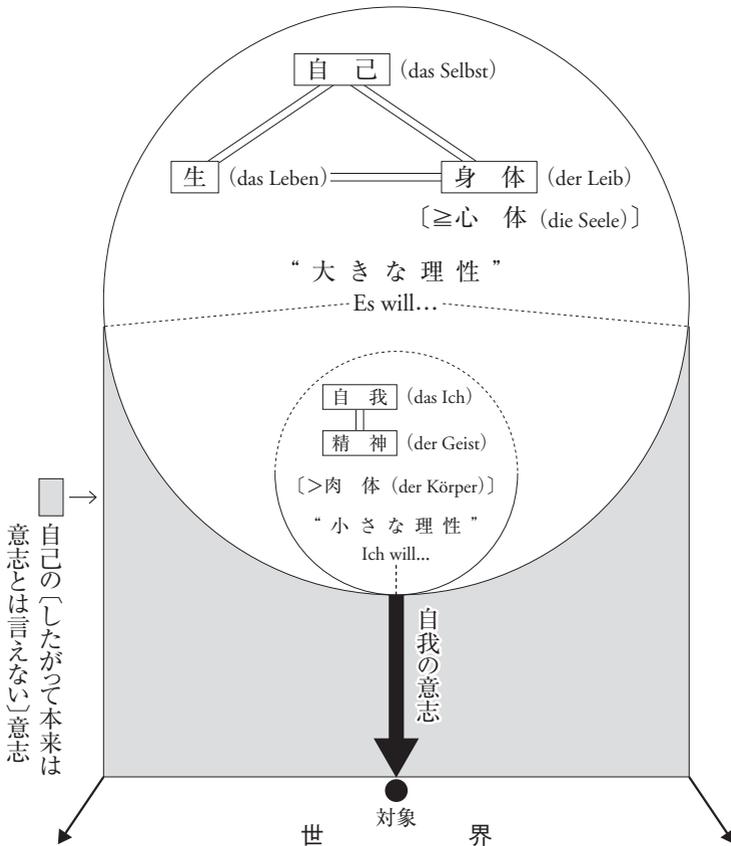
(一) ヴェネツィアの幻想——『墓の島』

1. 第Ⅰ部における「力となる意志」に向かう道筋

『ツァラトウストラはこう言った』¹⁾のなかで「力となる意志」について直接この語を口にして具体的に説明するのは第Ⅱ部第12章『自己克服について』においてである。だが、前論文²⁾で確認したように、すでに第Ⅰ部で、第Ⅱ部のこの章での「力となる意志」の直接的言及へと向かう道筋が順を追って準備されていた。ことに第Ⅰ部第4章『身体の軽蔑者たちについて』では、「自我」(das Ich)と「自己」(das Selbst)の区別が語られ、前者がもつ「小さな理性」と後者がもつ「大きな理性」とが対比され、そのそれぞれに呼応する二通りの意志の在りようが示された。前論文で、その概念図を論末に掲げておいたが、まずここにそれを再録して〔図版1〕、要点を再説しておく³⁾。

この概念図において、「小さな理性」が「私は欲する」(Ich will...)というかたちで外界に発せられる「自我」の働きかけと、「大きな理性」が「それは欲する」(Es will...)というかたちで外界に発せられる「自己」の同様の働きかけが対置されているのであるが、前者の働きかけをわれわれは「意志」と呼ぶが、後者をも同様に「意志」と呼ぶことは本来できない。そもそも「意志」とは「自我」の「意志」にはかならないからだ。したがって当図では「自己の〔したがって本来は意志とは言えない〕意志」としたのである。外界に働きか

図版1 ツァラトウストラの教説に基づく「自己」と「自我」の概念図



けて作用を及ぼそうとする「意志とは言えない意志」をあえて既存の概念で表現とするならば、それは、もはや「力」と呼ぶしかなかろう。「自己」が及ぼす作用の場合にあっては、「自我」の場合の「意志」に相当するものは、単に「力」という名称でしか表現できないのである。すなわち「自己」においては、「意志」(Wille)は「力」となる(zur Macht)のである。

概念図における「自己の〔本来は意志とは言えない〕意志」とは「力となる意志」のことであったのだ。かくして、すでに第I部のこの章で、まだ「力となる意志」という呼称こそ告げられていないが、その本質はすでに明瞭に示さ

れていたのであった。

2. 『墓の歌』の章の内容と性格

こうしたプロセスを経て第Ⅱ部に入り、その第12章の『自己超克について』の章で、いよいよ直接「力となる意志」が語られることになる。だが、この章に入る前に、その直前に置かれた第11章『墓の歌』⁴⁾に注目したい。続く第12章を照らす独特の光源となっていると思われるからだ。とは言え一見したところ、この章とツァラトゥストラが「力となる意志」を語り説く第12章との意味的な関連性は、とりあえずは認められない。内容の面でも文体の面でも、この章は、第9章『夜の歌』および第10章『舞踏の歌』とともに、ツァラトゥストラが語った教説ではなく、その内面にきざした思いと悩みを吐露した、いわばツァラトゥストラが綴る散文詩といった体裁となっている。じっさいに、この三つの章とも、「ツァラトゥストラはこう言った」という決まり文句の結語に代えて「ツァラトゥストラはこう歌った」という表現が使われている⁵⁾。精読に進もう。

『墓の歌』は、「あちらに、かの墓の島がある、沈黙の島が。そこはまた、私の若き日々墓でもある。そこに私は生の常緑の葉環を運んでゆこう」と決意してツァラトゥストラが海を渡って行ったところから始まる⁶⁾。この冒頭から、すでに仄暗い回想的トーンが支配している。「墓の島」の居並ぶ墓標を前にして、ツァラトゥストラは死者たち、すなわち自分自身の若き日々「おまえたち、すべての愛を湛えた眼差したち、神々しい瞬間たちよ」と呼びかける。だが、それらの日々は永遠に去ってしまった。今はそれを偲び、追憶の数々に涙することしかできない。だがこれらの日々のおかげで、今の私は孤独ではあっても、なおも最も豊かであり続けている。そのことだけが慰めなのだ。

「神々しい瞬間」の連続であった若き日々の喪失を嘆くツァラトゥストラの歌は纏綿と続く。かけがえのない幸福と充実をもたらしてくれたあれらの瞬間たち。あまりにも早く消え去った「おまえたち」を不実な「逃亡者」と恨みたくもなる。だが実は、おまえたちが私から逃げ去った」のでもなく、また、「私がおまえたちから逃げ去った」のでもない。「この私を殺すために、人々が

おまえたちを殺したのだ」——と、ツアラトウストラは、自分の過去の幸福な瞬間は「悪意ある」殺戮者たちによって殺されたのだと訴える⁷⁾。しかもそれは、ツアラトウストラを殺めるためにだった。輝かしい青春の日々が時間とともに失われてしまったことを惜しみ嘆くというのなら、さして特別な感慨とも言い難いだろうが、それが他者によって殺されたというのだから、これは穏やかではない。いったい殺戮者たちというのは誰なのであろうか。気になるところだ。

恨み言は止むことを知らない。「だが、私の敵たちに、こういう言葉を投げかけたい。おまえたちが私に対して行ったあの事に比べれば、あらゆる人殺しなどいったい何ほどのものだろうか」とツアラトウストラは口火を切り、殺戮者たちに対する告発と「呪い」は比喩を連ねて延々と——原書においては、ここから52行にもわたって——続いてゆく⁸⁾。いわく、おまえたちは私の若き日に夢見た理想と最愛の奇蹟を殺害した。おまえたちは「汚らわしい幽霊たち」を仕向けて幸福で純粹だった私を襲った。私から平穏な夜を「盗んで売り払って不眠の苦しみ」を私にもたらした。フクロウの怪物を連れてきて私の行く手を阻んだ。私が親しくしている人々を「膿にただれた腫瘍」に変身させてしまった。幸福に目も眩まばかりだった私の「行く道に汚物を投げた」。「私を愛してくれていたあれらの人々」が私のことを「最大の苦痛の種」だと叫ぶざるをえなくした。「私の最上等の蜜を変質させて駄目にしてしまった」。私の優しさにつけ込んで「卑怯な乞食たち」や「癒し難い恥知らずたち」をいつも送ってよこして群がらせた。「私が供えた最も聖なる捧げ物」に「脂ぎった施し物」を並べ置いた。「私の最愛の歌手」を説き伏せて「身の毛もよだつような陰気な調べを歌わせ」て、私の「天をも越えてゆかんとする」舞踏を阻んだ——。

「敵たち」に向けられるツアラトウストラの怨念は、これほどに深いのだ。しかもこうして、その呪いの言辭を列挙してみると、それらは呪詛のためのレトリックを単純に並べた立てたものというよりも、それらの背後に何らかの具体的な出来事が、あるひとつのストーリーが潜んでいそうに思えてくる。比喩的ではあるのだが表現がいやに生々しいのだ。叙事的あるいは即物的にツアラ

トウストラの言動を語ってゆくというのが基調の『ツァラトゥストラはこう言った』のなかで、感情が直接に投射された特異な部分であると言える。

誰の感情か。ニーチェのである。つまりここでは、通常は注意深く保たれている作品の登場人物として書かれるツァラトゥストラと、それを書くニーチェとの距離が例外的に著しく解消されている。ツァラトゥストラの口を借りて書き手であるニーチェその人が自分自身の怨恨と呪詛をじかに語っているのである。この部分に限っては、当作品を論じるにあたって安易に用いるのを厳に慎まなければならない“ツァラトゥストラ＝ニーチェ”という等式がかなりの妥当性をもって成り立つということだ。

そうであるならば、幸福な日々の殺戮者とは誰かという先に提起した問いも、ニーチェのその殺戮者は誰かというかたちに絞り込んで答えをさがすことができる。すなわち、自分の「若き日の想念やいちばん愛した奇跡」⁹⁾の殺戮者としてニーチェが激しく執拗に呪わずにはいられない敵たちとは誰なのかと問うことになる。この敵たちに見舞われる以前は、ニーチェは、「すべての存在は私のところでは神々しくあらねばなら」ず、また「すべての日々は私のところでは神聖であらねばならない」との信念を抱きつつ純粹で知的にも満ち足りた幸せな生を送っていた¹⁰⁾。そして今、「墓の島」にあって、並び立つ墓の前に立ち、それらはみずからの最良の時代が葬られたものと思いなして、幸福を奪われたことを強く嘆き、それを奪った者たちに激しい恨みの言葉を投げかけているのだ。

ところで「墓の島」という呼称は、この『墓の歌』の章を読むほとんど誰もにヴェネツィアのサン・ミケーレ島を連想させることであろう。『ツァラトゥストラはこう言った』のなかで、文章そのものからこれほど明瞭に特定の実在の場所を思い起こさせる記述は他にない。ここでもニーチェは具体的な固有名詞を挙げずに時と場所を抽象化するという『ツァラトゥストラ』執筆の基本姿勢を守ってはいるのだが、船で渡ってゆくしかない墓地の島に言及したことが、それだけで、これが特異な墓地島として有名なヴェネツィアのサン・ミケーレ島であることを明かす結果となってしまったのである。そして、このことが、この章を解釈するにあたって特別な鍵になる。つまり、ヴェネツィアおけ

るニーチェという具体的な伝記的視点を直接的に導入して解釈することが——『ツァラトゥストラはこう言った』の各章の解釈にあたっては例外的に——可能となるのである。

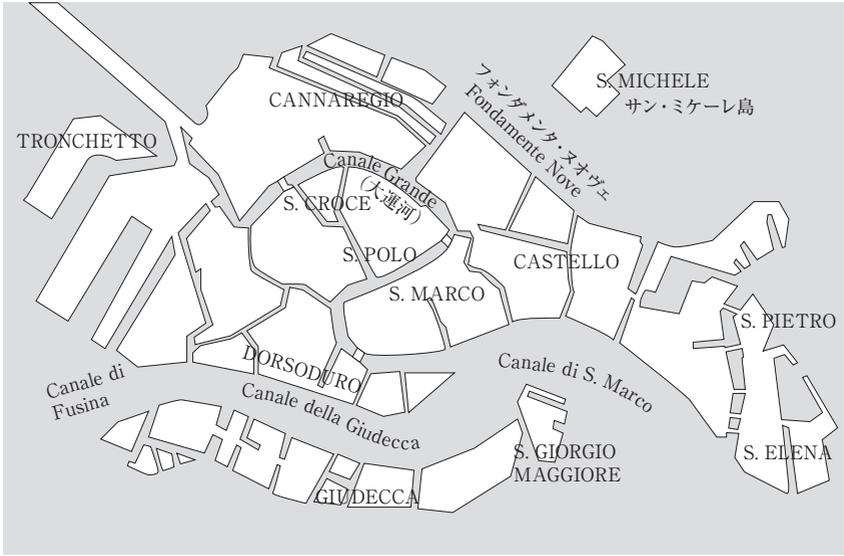
3. ニーチェとヴェネツィア

ニーチェは全生涯のなかで5回ほどヴェネツィアに滞在している。第一回目が1880年3月14日から7月1日頃まで、第二回目が84年4月21日から6月20日頃まで、第三回目が85年4月10日から6月6日まで、第四回目が86年4月30日から5月8日頃まで、第五回目が87年9月21日から10月21日までである¹¹⁾。このアドリア海のラグーンに浮かぶ夢幻的な海上都市にニーチェがやって来るきっかけとなったのは、バーゼル大学での教え子で作曲家として高く評価していたベーター・ガストことハインリヒ・ケーゼリッツが住んでいたからだ。じつはベーター・ガストという別名を与えたのはニーチェであり、そうしたほどに両者は緊密な間柄だったのである。ヴェネツィアではニーチェは何度かガスト宅にも逗留している。

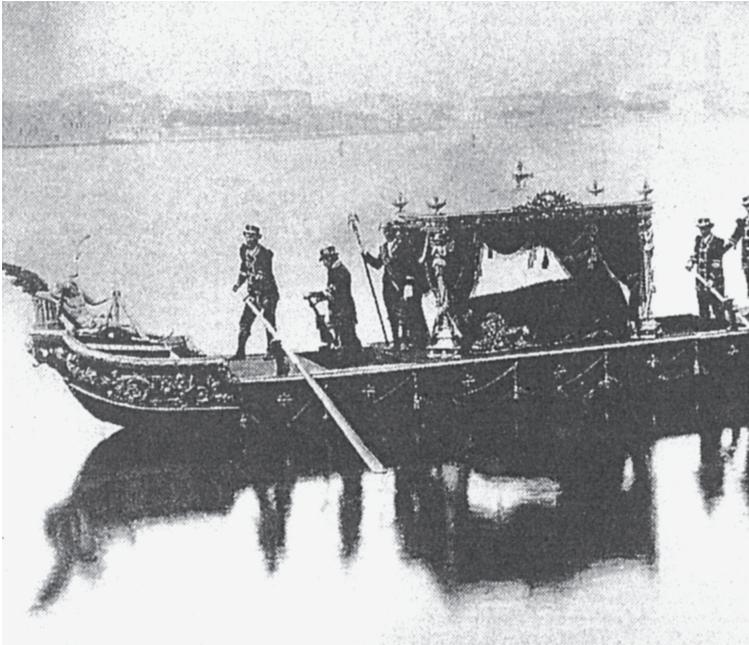
さて上記の5回にわたるニーチェのヴェネツィア滞在のうち、本論との関係でとりわけ興味深いのは1880年の第一回目のそれである。なぜなら、ニーチェは、この約2年半後の1883年2月に『ツァラトゥストラはこう言った』の第Ⅰ部を、同年の初夏には第Ⅱ部を書き上げているからである。『墓の歌』の章は、この第一回滞在のあとに続く時期の作なのだ。翌年の初頭には第Ⅲ部も出来上がった。つまり第一回目の滞在と第二回目の滞在との間の期間に、当初ニーチェがこの著作の完結と考えていた第Ⅲ部までの執筆が完了している。したがって『墓の歌』と第一回目のヴェネツィア滞在との関連を問うことには時間的な無理がない。

とりわけ目を引くのはニーチェと「墓の島」サン・ミケーレ島との接点だ。ヴェネツィア到着直後のニーチェは、程なくしてフォンダメンタ・ヌオヴェにあるパラッツォ・ベルレンディスに移り住んだ。ニーチェが自分で探して選んだもので、その広々とした住居の窓からは海に浮かぶサン・ミケーレ島を望むことができた。ニーチェはその景色が気に入っていたようだ。海に浮かぶ「死

図版2 ヴェネツィア本島とサン・ミケーレ島



図版3 喪のゴンドラ (1875年頃)



の島」という、この墓地の島の唯一無二の異様な在り方がニーチェのイマジネーションを刺激したであろうことは想像に難くない。それが、『墓の歌』の章の陰鬱で詠嘆的な基調にも影響を及ぼしているように思える。

ニーチェは、転居後即座に書簡をしたためずにはいられなかった。サン・ミケーレ島、ムラーノ島、トルチェロ島を望むフォンダメンタ・ヌオヴェ沿いの「新しい住居に移りました。岸辺に沿って木陰を長く散歩することができ（約20分も）、窓からは死の島と海が眺められます。」¹²⁾近くの船着場からはサン・ミケーレ島は間近で、船で容易に渡ることができた。ニーチェも、こうして何度か島を訪ねたのだろう。柩を運ぶゴンドラが厳粛な喪の正装に身を包んだ人たちを乗せて島へと静かに進む光景も目にしていたはずだ〔図版2および3参照〕¹³⁾。音楽に強い関心のあったニーチェである。この最初のヴェネツィア滞在から2年後、ちょうどニーチェが『ツァラトゥストラはこう言った』を執筆していた1882年に、リストが当時ヴェネツィアに逗留していたワーグナーを訪ね、この翌年の楽劇の巨匠の死を予感して一曲のピアノのための小品をものしていた。タイトルは《喪のゴンドラ》という。ニーチェには、自身の精神の黄昏が訪れる以前に、この作品を知る機会が——あるいはピアノの演奏を好んだニーチェのこと、みずから手で演奏する機会が——あったのだろうか¹⁴⁾。気になるところだが、それを知るすべはない。

4. ニーチェとワーグナー

ヴェネツィアはまた、ニーチェとワーグナーの人生が、運命的な関係にあったこの両者の人生が、最後に交差した場所だった。実際には、つまり伝記上の事実としてはニアミスではあったが。少々伝記的な領域に立ち入って眺めるとしよう。リストの予感的な中し、ニーチェの第一回目のヴェネツィア滞在与第二回目のそれとのあいだの1883年の2月、ワーグナーはヴェネツィアで死去した。先述したように、ちょうどニーチェが『ツァラトゥストラはこう言った』の第Ⅰ部と第Ⅱ部を夏に完成させた年だ。ということは、少なくとも第Ⅱ部のどこかにワーグナーの死が影を落としているとしても、時間的つながりの面では何ら不思議はない。また、ワーグナーの死がニーチェに少なからずのシ

ヨックを与えたであろうことも容易に想像できる。

周知のように当初ニーチェはワーグナーの熱狂的崇拜者であり、またワーグナーも若きニーチェの才能に惚れ込んでいたが、きわめて緊密だった両者のあいだには1874年秋頃から微妙な隙間風が吹きはじめ、1878年になると決定的に関係が悪化するまでにいたる。その後、敵対関係と呼べるような状態にまで達することになった。だがニーチェのワーグナーに対する思いは複雑で、これ以降もワーグナーの影を重く引きずってゆくことになったのである。

そのような状況にあったニーチェが、ワーグナーの死の報に接したときの心の反応の痕跡を第Ⅱ部のどこかに残しているとすれば、その第一の候補として思い浮かぶのが『墓の歌』の章だ。ワーグナーが死去した1883年にはニーチェは一度もヴェネツィアには足を踏み入れておらず、死去を知ったのも『ツァラトゥストラはこう言った』の執筆に熱中していたジェノヴァ近郊のリグリア海沿いの町ラッパロでのことである。だが、ヴェネツィアでワーグナーが死去したという知らせは、1880年、自身が初めてヴェネツィアを尋ねたときの体験をニーチェに生々しく蘇らせたのではないだろうか。これは充分にありうることだ。

連想の鍵となるのは死のイメージである。つまりヴェネツィアでのワーグナーの死という知らせが、ニーチェのイマジネーションのなかで、死者たちが眠る「墓の島」サン・ミケーレ島の姿とそこでの印象とを呼び覚ました。そのときもしかすると、かつて目にしたサン・ミケーレ島に柩を運ぶ喪のゴンドラの光景もニーチェの脳裏をかすめたかもしれない。もっとも事実としては、ワーグナーの遺体はサン・ミケーレ島に葬られたのではなく、列車でドイツに移送されてバイロイトに埋葬されたのではあったが。

ワーグナーの訃報に接したとき、ニーチェのワーグナー体験とヴェネツィア体験とが重なり合った。このように考えを進めてゆくと、先に掲げた問い、『墓の島』の章で「殺戮者」あるいは「敵たち」として糾弾された者たちはいったい誰であったのかという問いへの答えが視野のなかに入ってくる。すなわち、あの墓地の島での呪いは何らかのかたちでニーチェのワーグナー体験と関係しているとの推論が可能となり、そうであるならば、この脈絡のなかで「殺

戮者たち」「敵たち」とは誰にあたるかを問うことが可能となる。

ここまで絞り込めば、おのずと答えは見えてこよう。「殺戮者」「敵たち」とは、ワーグナーとニーチェの関係が次第に悪化してゆく過程のなかで、また最終的な決裂関係のなかで、ニーチェと敵対した人たち、つまりワーグナー夫妻を取り巻く連中（および／場合によっては夫妻本人）にほかならない。それならば『墓の歌』のあの執拗な呪いの言葉は納得がゆく。

ニーチェとワーグナーとの関係については、それだけでひとつの大きなテーマであり、ことに両者の対立が具体的にいかなる諸点をめぐるもので、またそれはニーチェとワーグナーそれぞれの思想と創造行為に関わるいかなる意味を照らし出すのかということを問うことは、ニーチェ論にとっても、またワーグナー論にとっても、きわめて興味深い重要なテーマとなろう。だが、それは『ツァラトゥストラはこう言った』を精読して吟味するという本論文の考察範囲を大きく超えている。したがってここでは、この両者の関係に関する既存の信頼にあたいする文献¹⁵⁾に依拠して、『墓の歌』での「殺戮者たち」「敵たち」が誰を指しているのかを推論するのに必要な伝記的事実に限定して両者の関係を一瞥するにとどめる。

すでに記したように、1874年秋には両者の幸福な関係に微妙な隙間風が吹き始めていて、「二人の間柄はもうすでに傷つきやすくなっていた」¹⁶⁾のであり、ニーチェは、2年後に出版することになる『反時代的考察』第四部の『バイロイトにおけるリヒャルト・ワーグナー』（Richard Wagner in Bayreuth）のためのメモを書き留め始めていた。これらからは、すでにニーチェがワーグナーという存在を客観視する方向に傾いていたことが確認できる。ひそかに「反抗の歴史」が始まっていたのだ。「ワーグナーの幅広い活躍のために参加することは、もはやできなかつた。むしろ反対に、これまで彼がやってきたワーグナーの音楽のための運動を偏狭であり、これまで彼が心を向けていたサークルを閉鎖的であると感じた。」¹⁷⁾

正面切つてのワーグナー批判でないものの『バイロイトのリヒャルト・ワーグナー』は、バイロイトの巨匠への疑念を行間にはっきりと滲ませていた。これが出版された1876年を機に、じっさいにニーチェのワーグナーとその一派

への反発は顕在化の度合いを強めてゆく。ニーチェはこの著作を契機に「なによりもまずワグネリアンがワーグナー礼賛をはっきりと打ち出して楽しんでいる様子に反旗をひるがえしたのである。』¹⁸⁾ワーグナーを信奉する取り巻きたちとの軋轢が始まる。これに続いて1878年に『人間的な、あまりに人間的な』(Menschliches, Alzumenschliches)が書き上げられた。ニーチェは、この本がワーグナー信奉者たちを刺激することを恐れて当初は匿名で出版することさえ本気で考えていたほどだったが、事実、名指しすることこそ慎重に避けられているにしろ「ワーグナーに対するほとんど隠れなき攻撃が、パイロイトの友たちを傷つけずにはいなかった。』¹⁹⁾ニーチェは、さまざまな方面から舞い込んでくる悪意に満ちた手紙に深く傷ついた。「その非常識さに彼は口がきけなかった。』²⁰⁾むろん、憤慨したこの「パイロイトの友たち」には、ニーチェのおどけた献辞が添えられた同書を受け取ったワーグナーとその夫人コジマも含まれる。いっぽうワーグナーのほうも同じ年にニーチェが暗に批判していた《パルジファル》の出来上がった台本に皮肉な献辞を書き添えて送り、ニーチェを刺激していた。対立が感情的なそれにまで深刻にエスカレートしてしまったことがわかる。

だがそうなってもニーチェのワーグナーへの関心は消え去ってしまったわけではなく、ニーチェはたびたびワーグナーの夢を見、遠い若き日の「幸せに酔う人々の島トリプシェン」でのワーグナーとの親密で濃厚な時間の思い出にふけることも頻りだった²¹⁾。若き日にトリプシェンのワーグナーの住居を足繁く訪れて体験した「愛を湛えた眼差し」に満ちた「神々しい瞬間たち」²²⁾、すなわちワーグナーとコジマとワーグナー家の友人たちと過ごした夢のような時間への愛おしさは募るばかりで、それが永遠に失われてしまったことへの悲痛な思いがこみ上げてくる。それだけに、それを奪った者たちへの恨みも深いのだった。

ひとたびワーグナーとの関係が見た目に動揺し始めるや、ニーチェ自身の理解を超えるかたちで、ワーグナーの周辺から感情的なリアクションが起こり、ニーチェを傷つけた。ニーチェにとっては、それらはもはや悪意としか言いようのないものだった。それまでニーチェは、心中に尊敬の念と疑念との葛藤を

抱えながら、芸術の未来を切り開くものと信じたワーグナーの芸術が広く認知されるために、またバイロイトに祝祭劇場を建てて《ニーベルングの指環》の上演を敢行するというワーグナーの一大事業が成就するために、ワーグナーを信奉する「友たち」の一団に加わって奔走してきたのだった²³⁾、そこには人間関係的な意味での種々の軋轢の火種がくすぶっていた。これが、一団に君臨する「マイスター」との関係が悪化するや否や、次々と発火し始めることになったのだ。前述したように、『人間的な、あまりに人間的な』を匿名で出版することを考えるなど、ニーチェがワーグナーを囲む人間関係に異様に神経質になっていたことから、ニーチェがワーグナー一派のなかでどれほどの苦渋を味わっていたかが想像できる。

ふたたび『墓の歌』の章に戻って、ツァラトゥストラ＝ニーチェの「敵たち」への呪詛を眺め返してみよう。先に行った引用（本論 30 ページ）と重複するが、ここではワーグナーとの対立関係から生じた人間関係の軋轢を念頭に読み直してみたい。じつによく、これらの非難の意味がわかるのではなからうか。彼らは私が若き日に夢見た理想と最愛の奇蹟を殺した——低俗な人々を煽って純粹で幸福だった私を襲った——不眠の苦しみに追い込んだ——フクロウの怪物（つまり似非知識人）を動員して私を痛めつけた——親しい友人たちを不愉快な人たちに変えてしまった——幸福にひたっていた私の行く手を汚いやり方で阻んだ——友人たちに疑念を抱かせ、私を厄介者扱いした等々。ワーグナーとの不和と決裂、またそれが引き起こしたワーグナー取り巻きの人々からの悪意ある非難と攻撃が、かつてトリプシェンで経験したような連帯の至福から自分を永遠に締め出してしまったこと、自分を批判し憎む「敵たち」の言動が信頼する友人たちの反発と離反を招いたこと。ツァラトゥストラ＝ニーチェの恨みは、こうしたことに具体的に向けられていると考えることが可能なのではあるまいか。また、「私の最愛の歌手」を説き伏せて「身の毛のよだつような陰気な調べを歌わせて」私の舞踏を阻んだという一節には、不和の大きな原因のひとつとなった楽劇の在りようをめぐるニーチェのワーグナー批判が背景としてあることを推測させる²⁴⁾。

『墓の歌』の章は、章末近くになって、どうしてこうしたことに耐えられた

のかという問いが発せられ、「意志」という言葉が語られて、急に悲観的なトーンから肯定的なトーンに転調する。「私の変わらぬ意志」は「私の足でその歩みを進めることを欲する」ことが言明され、「意志」が墓石を砕き、失われたものを復活させることを力強く宣言して章を結ぶ²⁵⁾。言うまでもなく、これが「力となる意志」に言及する次章『自己超克について』への橋渡しとなっている。

(二) 「力となる意志」の様態と機能——『自己超克について』

1. 「意志」なるものの全体像

『自己超克について』というタイトルが与えられた第Ⅱ部第12章は²⁶⁾、「最高の賢人たち」にツァラトゥストラが語りかけて、意志についての教えを説くというかたちで物語が進む。ちなみに「最高の賢人たち」とは、著名な哲学者たち、とりわけカント以降のドイツの哲学者たちのことを指しているものと解される²⁷⁾。これまで、作中で断片的に進めてきた「力となる意志」についての説明の帰結点であり、いちおうの結論部にあたる。つまり『ツァラトゥストラはこう言った』のなかで、「力となる意志」というテーマが最も集約的に語られる箇所であるわけだが、いっぽうこの箇所を、本作品中で「力となる意志」の意味上の本質を把握するにあたって最も重要な箇所であると言いかどうかについては大いに疑問の余地がある。もっとも中心的な問題、すなわち「力となる意志」がなにもものであるのかは、すでに当章以前に示されていたではないか。むしろ当章の位置づけは、補足的な説明を加えて、「意志」と呼ばれるものの全体を視野に入れたなかで「力となる意志」が実際に作用する姿を詳論したものと解すべきものと考えられることができる。こうして、いわば総まとめとして「力となる意志」論を完結させている。この章の内容を整理しつつ確認しておきたい。

章全体は内容的に六つの部分に区分できる。各部分の内容に応じたタイトルを付して、その六つの部分を以下に示す。なお、各部分の切れ目は原書のページと行で示している。

- [1] これまで「意志」はどう解されてきたか (146 ページ 10 行まで)
- [2] 「力となる意志」と価値評価 (147 ページ 6 行まで)
- [3] 生あるものにおける服従と命令 (同ページ 30 行まで)
- [4] 強者と弱者 (148 ページ 15 行まで)
- [5] 生の自己超克 (149 ページ 7 行まで)
- [6] 価値の創造と破壊 (章末まで)

では、各部分を読み進めて、この章に描かれている「力となる意志」の姿を整理してゆくことにしよう。

章の冒頭の [1] の部分では、ツァラトウストラは、「最高の賢人たち」が彼らの「意志」をどう呼ぶであろうかを想定したうえで、それをより適切に言い換えるかたちで「意志」についての自説を説き始める。ここで注意しなければならないのは、ここで話題となっている「意志」とは、「最高の賢人」たちが理解しているような伝統的な観念による「意志」であるから、当然のことにツァラトウストラが考えるような「自己」(das Selbst)に発するものではなく²⁸⁾「自我」(das Ich)に発する「意志」であるということだ。これが大前提となる。こうした従来からの常識的な「意志」を引き合いに出しつつ、これとは異なる新しい「意志」としての「力となる意志」について語っていこうというのがツァラトウストラの目論見なのである。

「最高の賢人たち」を熱心な探求に駆り立てる「意志」は、それを「真理への意志」(Wille zur Wahrheit)と呼ぶよりは「存在するあらゆるものを思考可能にする意志」(Wille zur Denkbarkeit alles Seienden)と自分なら呼びたいとツァラトウストラは言い²⁹⁾、彼ら「最高の賢人たち」が抱く「意志」の在りようを簡潔に総括してみせる。存在するあらゆるものを思考可能にするとは、あらゆるものを自分の精神の支配の下に置き、自分の精神に鏡像のように映し出されるようにすることである³⁰⁾。すなわちここでは、主体である「自我」が他の一切のものを客体として自分の精神のスクリーンに投射し、それによって、外部の世界を像として取り込み、自分の精神の支配下に置くという、人間の認識機能についての主客二元論的な解釈の要点が示されているのである。

続く [2] の部分で、ツァラトウストラは、これが「最高の賢人たち」の

「意志のすべて」であるが、それは「力となる意志と呼べるもののひとつ」(in Wille zur Macht) にほかならないと言う。「意志」の起点である「自我」は「力となる意志」の起点となる「自己」に含まれているのだから、「力となる意志」の(矮小化された)一形態と言うこともできるのである。また、このことは善悪や価値評価を口にする場合にあっても同じだと述べて、話題を善悪や価値の評価と「意志」の関係というテーマに向かわせる。「最高の賢人たち」つまり哲学者や思想家などの知識人は善悪や価値の体系を内包した世界——「その前にひざまずくような世界」³¹⁾——を客体として、すなわち像として打ち立てようとし、それに満足して悦に入っている。いっぽう民衆は、万物の「生成の流れ」のなかを流されてゆくだけだ。比喩的に表現すると、その流れのうえに小舟が浮かんで進んでゆくが、その小舟には価値評価が仮面をつけて厳粛に儀式張って座っている。³²⁾この流れに行方も知らず流されつつ、民衆は昔からの既存の価値観を担い続けている。しかも、そうした民衆が信じている善と悪は、今でこそ「最高の賢人たち」の「意志」とされるが、それはかつてそこに作用していた「古びた力となる意志」の成り果てた姿にほかならないのだ。もともと、こうした構図をつくり出したのは「最高の賢人たち」の「支配する意志」だったのである³³⁾。そしてツァラトゥストラは付け加える。この小舟が転覆して価値評価が減ってしまう危険は、「力となる意志」そのものに、言い換えれば、つねに自己を否定しながら乗り越える「生殖を続ける尽きることのない生の意志 (der unerschöpfte zeugende Lebens-Wille) にあるのだと。

ここでツァラトゥストラの話は、あらゆる生物にみられる服従と命令というテーマに移る。[3]の部分はツァラトゥストラが生物を徹底的に観察した結果の報告というかたちで展開してゆく。それから得られた結論は、あらゆる生物は、つねに服従するものであること、自己に服従できないと他から命令されること、命令することはその命令に服従する者の重荷まで担うことになるので服従するよりも難しいという三点だ。このうちの最後の点をツァラトゥストラは最も重視し、命令には試みと冒険という面があり、命令者は命令に自分を賭けているのだと付け加える。「自分自身の手になる掟に対して自分自身が裁き手に、また、それへの復讐者、その犠牲者にならねばならない」³⁴⁾からだ。「何

が生き物に、それが服従し、命令し、またさらに命令しつつ服従するものであるよう説き伏せるのか³⁵⁾という問いが発せられて、続く〔4〕の部分に入る。

この部分で、まずツァラトゥストラは、すべての生物に「力となる意志」が認められることを言明して、この力こそが生物を支配していることを示唆して、先にみずから発した問いに答える。そして仕えている者の「意志」にも主人であろうとする「意志」が潜んでいると言い添える。つまり「力となる意志」という原理に貫かれて、服従と命令とが相互に連鎖していることが指摘され、さらに、この相互的連鎖が弱者と強者との関係を規定しているという事情が説明される。その結果「犠牲と奉仕と愛の眼差しがあるところにはまた、主人であろうとする意志があるのだ。より弱い者は、ほら、抜け道を通して城のなかに、より強い者の心臓のなかにまでも忍び込み——そして力を盗むのだ。」³⁶⁾

ちなみに、この〔3〕と〔4〕の部分で、ツァラトゥストラは、服従と命令および弱者と強者の関係に着目して「力となる意志」を説明しているわけであるが、この着眼点ならびに一種の心理学とも言うべき発想は、生物一般の観察結果から得られたものというよりも、むしろ人間の観察から得られたもののように思えてくる。思考の筋道としては、先に人間観察があつて、それを生物に拡大して表現したのではなかったか。さらに、たとえば命令には試みと冒険という側面があつて命令者は命令に自分を賭けているのだといった表現などは、人間を念頭に置いたものであるとしか考えられない。ここでこうしたことに注目しておくのは、けっして無駄ではないと思う。

しかも、あえてコメントしておくならば、これらの指摘は、鋭い感性に発する独創的で卓越した人間観察の成果というよりは、冷静な観察に基づくものであるとはいえ、また巧みに説明されているとはいえ、多くの人が大なり小なり体験的に蓄積しているような、意外に月並みな指摘なのではあるまいか。

さて、〔5〕の部分に入ると、ツァラトゥストラは「力となる意志」の在り方に迫ろうとし、「生」(das Leben)がみずからの「秘密」を明かしたものとして「私は自分自身をつねに自分で超克せざるをえないものである」という命題を掲げる³⁷⁾。これは、既に確認しておいたように³⁸⁾、第Ⅰ部第5章『歓喜する情

熱と受苦する情熱について』において徳同士の闘い、その「嫉妬心、競争心」に言及して「人間は超克されねばならない或るもの」だと述べられていた命題と構造的に完全に一致している。「力となる意志」が、人間の自我や精神を超えて作用する力として、このような葛藤を生じさせるのである。

続けてツァラトゥストラは、さらに生物のこうした在り方を指して「産出させることへの意志、あるいは目的への、より高いもの、より遠いもの、より複雑なものへの衝動」(Wille zur Zeugung oder Trieb zum Zwecke, zum Höheren, Ferneren, Vielfachen)³⁹⁾などとも言えるだろうとし、そのうえで、これらはすべて、同じひとつの「秘密」を言いあらわしていると補足する。しかも生物は喜んでこの秘密の原理に従うのであり、没落、たとえば落葉も、この原理に従って「生」が果たす自己犠牲にほかならないのだと続ける。「私は戦いであらざるをえないこと、そして生成と目的と目的同士の矛盾対立である」こと⁴⁰⁾が私の「意志」——つまり私という(「自我」ではなく)「自己」が抱く「力となる意志」としての私の「意志」——の本質であるということがわかれば、その「意志」が「どれほど曲がりくねった道を行かざるをえないか」もわかるだろうとツァラトゥストラは述べる。ここで「曲がりくねった」(krumm)という形容詞が字間を空けて強調されているのは、「生」は生成のなかにあって目的に向かって一直線に進むものではなく、一旦定立された目的を否定して次の目的が定立されるというかたちを無限に繰り返して運動するものであり、その結果、「生」は永遠の曲折(したがって目的はつねに暫定的であって最終的な目的というものはない)を本質とした「曲がりくねった」道を進むことになるからである。このように「生」がたどる道が直線的に目的に(右肩上がりに)向かう目的論的な行路ではなく、永遠の過渡⁴¹⁾、つまり永遠の回り道であるとされていることは、しっかりと押さえておきたい。これが「力となる意志」に従う「生」の在り方なのである。弁証法的発展と混同してはならない。

「私が何を創造しようと、また、それをどれほど愛そうとも——すぐに私は、それと、それへの私の愛に対する敵対者とならざるをえないのだ」⁴²⁾とは、そうした「生」のメカニズムを端的に言い表したものにほかならない。このあとツァラトゥストラは、「深い認識をしている人」(Erkennender)⁴³⁾は「力となる意

志」という足で、つまり「力となる意志」を原動力として歩んでいることを告げたあと、「生存することへの意志」(Wille zum Dasein)は論理的にありえないことを説明しているが、これはショーペンハウアーの意志論への批判と見ることができるだろう⁴⁴⁾。たしかに「生」のあるところにのみ「意志」はあるにしろ、ツァラトゥストラの見解にあっては、それは「力となる意志」ということになるのだ。

ツァラトゥストラの話は、ふたたび〔6〕の部分で善悪と価値評価という話題に戻り、価値評価者たちが既存の価値や善悪をもとに支配力を及ぼして、それで身を守り、それを誇りとし、それに自己陶醉していることを指摘する。だが、先に〔5〕で確認したメカニズムが示すように善悪も価値も不変のものではなく、やはりつねに自己超克を遂げてゆく。これによって「卵の殻は割れる」⁴⁵⁾とツァラトゥストラは言う。価値や善悪の創造者となるはずの人は、まずそれらの破壊者とならねばならない。したがって「最高の悪」を超克して破壊するためには「最高の善」として、創造的な善が必要なのだ——これは、あなたがたには苦々しい事実かもしれないが、語らないわけにはいかない、とツァラトゥストラは「最高の賢人たち」に語りかける。「私たちの真理に接して壊れるすべてのものは壊れてほしいし——また実際に壊れうる。建てるべき家は、まだたくさんある」⁴⁶⁾と破壊と再創造が可能であることを示唆してツァラトゥストラは話を終える。

以上に見てきたように、この章は「力となる意志」について、その原理や意味を解説するというものではなく、既往の意志論と対比しながら、その位置づけおよび価値評価との関係、生物、じっさいには人間におけるその発現の様相とが語られている。その点では、いわば「力となる意志」の機能論と言ってもよかろう。しかもここで、「力となる意志」の機能を論じる視点は、他者のそれ、すなわち「自己」の外部に機能するそれとの闘いではなく、最終的には、「自己」の内部に機能するそれ同士のせめぎあい、すなわち不断の「自己—超克」という原理において、「自己」に向かう視点へと収斂していることは、けっして忘れられてはならない。少なくとも『ツァラトゥストラはこう言った』のなかでは、「力となる意志」論は、「自己」に不断の超克をもたらす力の原理

として措定されているのだ。

2. まとめと補足

(1) 作中での「力となる意志」論の流れ

『ツァラトゥストラはこう言った』という作品をのなかで「力となる意志」がどのようなプロセスをたどって説明されてゆくかを、前論文からはじめて、このプロセスに関連する各章において、場合によっては章のメイン・テーマからの逸脱も厭わず、これまで吟味確認してきた。内容的には繰り返しとなるが、まとめとして、あらためて当該の章ごとの要点を箇条書きにして明記しておきたい。

◆『三つの変身について』（第Ⅰ部第1章）：〈子供〉の類型が示している「ひとつの神聖なる肯定」（ein heiliges Ja-Sagen）⁴⁷⁾とは、遊技のように純粋な、意味や目的をもたない、そのまま行為自体が自己肯定であるような肯定をいう。これが新しい価値の創造を可能にする。この局面での「意志」は何かを求める「意志」ではなく、ただ動態的な「意志」そのもの。それがどこかに向かうという特定の方向性をもたず、ただ何であれ、何かを実現することができる可能性としての力にほかならない（「力となる意志」（Wille zur Macht）の本質の前触লের提示）。この場合、前置詞 zu(r) は、「何かをそれに向かって求める」という意味に取るべきではなく、「何かになる、なろうとする」という意味に取るべき。

◆『背後世界論者たちについて』（第Ⅰ部第3章）：「ひとつの新しい意志」を人間に教えることの予告。

◆『身体の軽蔑者たちについて』（第Ⅰ部第4章）：「小さな理性」である「自我」と「大きな理性」である「自己」との対置。総合的な生命体としての全体である身体を支配しているのは「自己」であって「自我」ではない。自我＝小さな理性に発するものが「意志」であるのに対して、自己＝大きな理性に発する場合には、もはや「意志」とは呼べない（「力となる意志」を示唆）。

◆『欣喜する情熱と受苦する情熱について』（第Ⅰ部第5章）：「徳」（Tugend）とは、一般に理解されているような宗教的または道徳的に善とされることを行う資質ではなく、純粹に各人の「生」に固有の情熱から行為できる資質。それ

は「自己」の層において、「大きな理性」から自身と世界に即応した行為だ。「徳」同士は熱烈な競争心 (Eifersucht) を抱く。

こうして本論文で第Ⅱ部第12章『自己克服について』の章に進み、その読解を行ってきたわけであるが、いくつかの点について、さらに補足しておきたい。

(2) 「力となる意志」という訳語について

従来は「力への意志」あるいは「権力への意志」などと訳されてきた「der Wille zur Macht」の訳語に、これら従来からの訳語を採用しなかった理由は、すでに詳細に論じたとおりである。要点だけ再説すれば、この「新しい意志」は、「自己」を前提としたもので、「自我」を前提とする従来の「意志」とは質的にまったく異なるから、それには別の呼称が必要となる。また先に確認したとおり、この意志とは言えない“X”としての「意志」は、何かを欲する「意志」として発現するのではなく、何かに作用する能力を可能性として秘めた「力」として発現する。したがって“X”に呼称を与えるならば「力」となって発現する「意志」、つまり「力となる意志」と表現しなければならないのである。

したがって、これを「力への意志」等々と目的を志向するかたちに訳すことは、少なくとも『ツァラトゥストラはこう言った』の範囲で確認されるかぎりでは、上記の違いを無視した誤解、すなわちニーチェの思想の核心にかかわる決定的誤訳と言うべきである。これは今後正されなければならない。訳語に関連して誤解のないように付言しておけば、当論文の本章(二)の1で、旧来の思想の担い手である「最高の賢人たち」が抱く(あるいは抱くであろう)「意志」との関連では、たとえば「真理への意志」あるいは「思考可能性への意志」等々というように、同じ「Wille zu...」という表現形式を「……への意志」というように訳し分けたのも、この質の違いを考慮したからである。

ちなみに、「der Wille zur Macht」についての筆者のような捉え方は、考察範囲を『ツァラトゥストラはこう言った』に限定せず広くニーチェの著作全般を俯瞰して、その思想の全体を論じたドゥルーズ、ハイデッガーの見解⁴⁸⁾によっ

て裏付けられるうることにも言及しておきたい。

(3) 『墓の歌』の章と『自己超克について』の章との関係について

本論文の前章（一）で取り扱った『墓の歌』の章と（二）で扱った『自己超克について』の章との関連性に留意する見方はこれまで提起されてこなかった。むしろ両者は互いに異質なものとして全く切り離して考えられてきた。本論は、第Ⅱ部の第11章『墓の歌』を、この章の直後に置かれた第12章『自己超克について』とのつながりを重視して眺めてみようという試みである。

先に注意を喚起しておいたように（本論42ページ）、ツァラトゥストラが服従と命令および弱者と強者の関係を具体的に語りながら「力となる意志」を説明してゆく箇所（先の内容区分によると〔3〕と〔4〕の部分）の背後には実際の生々しい人間観察を想定することができ、これらがその結果から得られた記述であるもののように思われるふしがある。そもそも命令と服従、弱者と強者という着眼点そのものが、それを匂わせている。そればかりでなく、たとえば、命令者は自分の命令に自分を賭けているのであり、自分がつくった掟の裁き手にも処罰者にも犠牲者にもならねばならないという記述や、弱者が強者に仕えるのは自分よりもさらに弱者の支配者になろうとする意志があるからだという記述、あるいは、犠牲と奉仕と愛の眼差しがあるところには支配者になろうとする意志もあるという記述。これらの記述のどれもから、ある具体的な人間関係が背景に見えてくるのだ。ニーチェがワグナーとの関係のなかで経験したワグナー（すなわち最も大なる強者）を頂点とした人間関係をめぐる諸体験が、ここに投影されているのではなかろうかと思われるのだ。二つの章を並べて考えたとき、そこからニーチェのワグナーおよびその周辺との軋轢の体験が浮かび上がってくる。ワグナーへの犠牲と奉仕と相互の愛の眼差しのある人間関係のなかにも、強者と弱者、命令と服従の相互関係の綱目が複雑に入り組んで錯綜していたことを、まさにニーチェは深刻な打撃とともに体験していたのだ。

『墓の歌』ではニーチェのこの体験が、いわばサン・ミケーレ島の墓地の下にひそんでポエジーの姿をまもって歌われていた。『墓の歌』のこのような解

積を踏まえて、この章から直接に続く『自己超克について』の章を眺めると、とくにこの伝記的事実のもつ意味が浮かび上がるのだ。この章を書き上げる3年弱前にヴェネツィアにあってサン・ミケーレ島を眺めていたニーチェは、おそらく、この墓地の島に柩を運んで向かう喪のゴンドラの姿を、仮面を付けて厳かに着飾った価値評価を乗せた小舟であると幻視したこともあっただろう。そして思うに、ヴェネツィアの大運河沿いの館^{やかた}でワーグナーが世を去ったという報せに、ニーチェは、この喪のゴンドラをあらためて幻視したのではなかったか。かつて若き日の自分にとって価値評価規準そのものであったワーグナーの遺骸を今や海の彼方に運び去る異様な喪のゴンドラの姿を。

もとより、『自己超克について』の章に、その一部に関してとはいえ、ニーチェの実体験を重ね合わせてみるのは資料による確たる裏付けのない仮説にすぎない。自分を苦境から救ったのは「意志」であったことを認めて、「私の意志よ」という言葉を連呼して、『墓の歌』の章は、「力となる意志」をテーマとする『自己超克について』の章に移る。この両章をつなぐブリッジが「意志」、しかもそれは「力となる意志」だったのだ。『墓の歌』の伝記的側面が『自己超克について』の章の一部と地下茎の連りのようにつながっていたとしても、それはまったく不思議なことではない。

ただし言うまでもなく、ここに提起した仮説は、『ツァラトゥストラはこう言った』という作品のありうるかもしれない切片としての一断面の指摘にすぎない。この作品は、記述の基本的な性質としては、ニーチェ自身の私的体験という層が消去されて成立している。あくまでもツァラトゥストラが言ったことだという建前も、それを徹底するための仕掛けだった。書き手自身が姿を消すというのが、この作品でのニーチェの基本姿勢であることには変わりがない。まるで、秘められた極私的ストーリーを、論理的構築を主眼とした音楽テキストの背後にひた隠す表現主義の音楽作品、たとえばアルバン・ベルクの《叙情組曲》のように⁴⁹⁾。こうした点にニーチェのテキストの時代に先んじた新しさを指摘してもよいかもしれない。しかも、この『墓の歌』の章では、それを破ってしまうという仕掛けまでも思わず（あるいは意図的に？）残してしまった。1880年代に書かれたものとは思えない新しさである。

またいっぽう、『ツァラトストラはこう言った』という作品を読んで哲学者たちは、この作品をニーチェの書いた哲学書のひとつとして扱い、この作品に対してはつねに及び腰であったとは言え、基本文献として哲学研究の対象とすることもできた。この作品の描写や記述方法の斬新さ、またそこに豊富に内包される文学的表象の面白さ、さらには注意深くかつ遊戯の可能性さえ秘めて隠されている私小説的ストーリー性のことなど、このテキストの革新性の一切を無視し閑却することと引き換えに。

この作品に読み取れるニーチェの思想は、もちろん重要である。論者も本論文を含む三つの論考において、できるだけ言葉に厳密なアプローチを用いて精読することによって、その解明につとめた。だが、個性的で刺激的な文学的テキストとしての側面を切り捨てるつもりはまったくない。むしろ、それを重視したい。『ツァラトストラはこう言った』という作品を、複合的に読み解きたいというのが論者の本意である。『墓の歌』から『自己超克について』の章を照らし出して、そこに仮説として伝記的な写像を見出そうとする今回の試みは、そうした当作品の複合的解読への小さな試みのひとつである。作品に対するこのような基本的アプローチを再確認したうえで、『ツァラトストラはこう言った』における「永遠回帰」の在りようの解明を引き続いての課題としてゆきたい。

注

- 1) 本論文で底本とするのは以下のニーチェ全集である。

Friedrich Nietzsche: Sämtliche Werke, Kritische Studienausgabe in 15 Bänden. Hrsg. von Giorgio Colli und Mazzino Montinari. München, Berlin, New York (dtv de Gruyter Dünndruck-Ausgabe) 1967-1977.

この全集 (KSA) は原典批判校訂版ニーチェ全集 (KGW) に厳密に準拠したものである。

本論文では KSA の巻数をローマ数字で示し、それに続けてページ数をアラビア数字で示す。さらに参照の便宜上必要があると思われる場合には行数 (Z.) も示すことにした。なお、『ツァラトストラはこう言った』以外のニーチェ作品からの引用の際には、さらに原題およびその邦訳も付した。

なお、作品中の各章には、上記の原典では章の順番に即した数字は付されていない

いが、便宜上、各部とも第1章、第2章……というように番号を付しておいた場合がある。

- 2) 岩下眞好：「力となる意志」論に向けて——『三つの変身』と『歓喜する情熱と受苦する情熱』の二章を中心に——」（慶應義塾大学法学研究会・編『教養論叢』第136号，2015年）30ページ以下。
- 3) 図版1：ツァラトゥストラの教説に基づく「自己」と「自我」の概念図（岩下：前掲論文41ページ）の図の再録。
- 4) IV 142ff.
- 5) それぞれIV 138, Z.13；IV 141, Z.20；IV 145, Z.14.
- 6) IV 142, Z.2ff. 以下の引用もこれに続く文から。
- 7) IV 143, Z.6f. 「m i c h」〔「私を」(殺したのだ)〕という語が字間を空けて強調されていることも留意するにあたいする。
- 8) IV 143, Z.15-144, Z.32.
- 9) IV 143, Z.10f.
- 10) IV 143, Z.30.
- 11) Friedrich Nietzsche: Chronik in Bildern und Texten. München und Wien 2000. (以下ではChronikと略記)
ヴェネツィア滞在の年月日は上記の書物によったが、日付については文献によって若干の異同がある。
- 12) Friedlich Nietzsche: Sämtliche Briefe. Hg. von G. Colli und M. Montinari. Berlin 1986 (KSB), 6, Nr18, S.13.
なおChronik, S.471ff.にも、この書簡の引用はじめ、ニーチェの第一回ヴェネツィア滞在中のドキュメントが多数収録されている。
また、下記の書物は著者自身がニーチェの足跡をヴェネツィアに訪ねて写真とともに記述したもので興味深い。本書で著者は、サン・ミケーレ島を望むバラツツォ・ベルレンディスの窓からの眺めに言及し、『墓の島』の章を想起して、ワーグナーの死がニーチェのなかでサン・ミケーレ島の思い出と結びついた可能性を示唆している。もとより旅行記であるので、それ以上の深い論及には及んでいないが。岡村民夫『旅するニーチェ リゾートの哲学』（白水社，2004年），141ページ以下。
- 13) 図版3は、Chronik, S.470より転載した。
- 14) Franz Liszt: La lugubre gondra II, S200/2 (1882).
この作品をニーチェが知っていたかどうかは資料的に詳らかではない。
なお、この曲には何点かのレコード録音があり、なかでもデジュー・ラーンキ (harmonia mundi QUI903024) およびクリスティアン・ツイメルマン (Deutsche

Grammophon 431780-2) が、互いに異なる解釈ながら両者とも傾聴にあたいする。

- 15) Dietrich Fischer-Dieskau: Wagner und Nietzsche. Der Mystagoge und sein Abtrünniger. München 1974.

同書の邦訳には荒井秀直・訳『ワーグナーとニーチェ』（白水社、1977年）があり、それに基づく文庫版（ちくま学芸文庫、2010年）も刊行されている。ドイツの大バリトン歌手による同書は、ワーグナーとニーチェの複雑多義な関係を、党派的な見地からどちらか一方の立場に著しく偏することを避けて丹念に追い、「ワーグナーという嵐の前に大きくゆれる青年ニーチェの不幸な愛情」（ちくま文庫版訳者あとがき）を共感豊かに綴ったものであり、才能豊かで多感な青年から自立した思想家に向かうニーチェの精神的・人間的葛藤を知るには好適であるとともに、この観点におけるニーチェとワーグナーの関係の伝記的アウトラインを知るには適切な文献である。本論文における以下の伝記的事実は、基本的にこの文献による。なお本論文では、同書からの引用は、荒井秀直教授に親しく接して刺激を受けることのできたひとりとして、その学識と訳業への敬意をこめて、上記ちくま文庫版（以下では『ワーグナーとニーチェ』と略記）から行うことにする。

- 16) 『ワーグナーとニーチェ』235 ページ。
 17) 前掲書 248 ページ。
 18) 前掲書 236 ページ。
 19) 前掲書 343 ページ。
 20) 前掲書 344 ページ。
 21) 前掲書 363 ページ。
 22) IV 142, Z.7f.
 23) 「私が私の最難事を行い、それを克服して勝利を祝ったときおまえたちは、私を愛していた人たち、私が彼らに最大の苦痛を与えたと叫びました」という箇所（IV 144, Z. 9ff.）に、ワーグナーの事業のために、世慣れしていないニーチェが心中の葛藤と闘いながらも奮闘しながら貢献したものの、けっきょく傷ついて孤立していったという経緯を重ね合わせることもできるのではあるまいか。
 24) 当作者手塚富雄による訳（『世界の名著』46, 中央公論社, 1966）の当該箇所についての注釈（5）には、訳者自身によるものか、他に出典があるのかは明らかにされておらず、また前後の脈絡を欠いた唐突な指摘ではあるが、「ワーグナーが、キリスト教の教えをあらわにした『パルジファル』を制作したこと」とある。
 25) IV 145, Z.12f.
 26) Von der Selbst-Ueberwindung. IV 146.

なお、このタイトルが Selbst と Ueberwindung との間にハイフンを置いて二語を連結しているのは、この Selbst が「自己」という意味の名詞であり、副詞（「自分

自身で、それ自身で」ではないことをはっきりさせるためであろう。つまり、「自己」を「超克すること」について、というのがタイトルの意味なのであり、訳としてはハイフンを生かすことなく「自己超克について」とした。これで、この意味は尽くされると考えるからだ。

27) ここでは、「最高の賢人たち」における「真理への意志」を問題にして議論に入るわけだが、これは、哲学者たちがこだわり続けてきた「真理への意志」へのニーチェの批判で議論が始まる『善悪の彼岸』(Jenseits von Gut und Böse, 1886)の第一章『哲学者たちの先入観について』の冒頭の第1番のアフォリズムの部分(V 15.)とテーマ的に重なり合っている。

28) 岩下：前掲論文 30 ページ以下。

29) IV 147, Z.4.

ツァラトゥストラは、同様の見解をすでに第Ⅱ部第2章『欲びに満ちた島々にて』(Auf den glückseligen Inseln)のなかで(神を思考する可能性に関連して)語っていた。

IV 109, Z.23, 24ff.

30) IV 146, Z.8ff.

31) ebd.

32) IV 146, Z.17f.

33) IV 146, Z.23f.

34) IV 147, Z.25ff.

35) IV 147, Z.28ff.

36) IV 148, Z.12ff.

37) IV 148, Z.17f. この命題の全文が字間を空けて強調されていることにも注目しておきたい。当章で最も重要な命題であることが示されている。

38) 岩下：前掲論文 40 ページ。

39) IV 148, Z.19f.

40) IV 148, Z.25ff.

41) 「過渡」については、すでに第Ⅰ部序説において説かれていた。これについては以下を参照されたい。

岩下真好「網渡りの構図と寓話——ツァラトゥストラの序説をめぐって——」(慶應義塾大学法学研究会・編『教養論叢』第135号, 2014年), ことに10ページ, 17ページ以下, 25ページ以下。

42) IV 148, Z.28f.

43) IV 148, Z.30ff.

44) IV 148, Z.33ff.

生存していなければ意志もないし、すでに生存しているかぎりは今さら生存を意志することなど無意味なわけだから、生存と意志とを関連させて論じてナンセンスだというのがツァラトゥストラの論理だ。ならばショーペンハウアーの「生存することへの盲目的な意志」は、じつは論理的にもはや「意志」としてはありえないということになる。つまり、このようなかたちでの意志の客観化は何事も語っていない。ここでは、意志は結局のところ、それ自身の姿を反映した仮象にすぎないということになる。生への意志という考え方が孕むこの決定的な矛盾は苦悩を生むばかりで、それが絶対的なペシミズムの根本的な原因となる。ニーチェは、「力となる意志」論を構想することによって、これを乗り越えようとしたのだった。ところでもし、このような脈絡を背景に、ここでショーペンハウアーが想起されるとすれば、この「深い認識をしている人」は当然この哲学者を指していると見ることができるだろう。

45) IV 149, Z.17ff.

46) IV 149, Z.26.

47) IV 31, Z.10f.

48) Gilles Deleuze: Nietzsche et la philosophie, Paris 1962. その翻訳である足立和浩・訳『ニーチェと哲学』(国文社, 1982年)の第二章(64ページ以下, ことに78ページ以下)および第三章(110ページ以下)には、ドゥルーズの「力(への)意志」(著者の意に沿ってこう訳されている)の考え方が示されているが、それは本質的な意味において「力意志」と訳すこともできる。それは「何を意味するのか。意志が〈力〉を欲する、目的として〈力〉を欲望し求めるということではとりわけないし、〈力〉が意志の動因だということでもない」(同書120ページ)し、あるいはまた、「意志が〈力〉を欲するということの意味しているのではない。力(への)意志は、その起源においても、意味作用においても、その本質においても、いかなる擬人論をも含まない。力(への)意志は、全く別な風に解釈されねばならない」(同書127ページ)。あわせて訳注(五)にも簡潔な説明があり、またそこでは、訳者はハイデッガーも同様な解釈を行っていることに補足的に言及している。

49) ベルクの《叙情組曲》Alban Berg: Lyrische Suite für Streichquartett (1925/26)には、ベルク自身の実人生に依拠する隠されたプログラムがあることが作曲者の没後の研究によって知られている。このベルクの態度は、本質的に、表現に対する先鋭化された近代的意識というべきものだ。